

指導と評価の一体化に向けて

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 小倉勝登

1. 学習評価とは

学習評価は、学校における教育活動に関し、子供たちの学習状況を評価するものである。「子供たちにどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、この学習評価の在り方が極めて重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性を持った形で改善を進めることが求められることが重要である。

つまり、学習評価には、子どもの学習状況を的確に捉えて評価することにより、「子どもたちの学習改善」につながるようにする側面と「教師の指導改善」につながるようにする側面という2つの意義があることがわかる。

評価に当たっては、いわゆる評価のための評価に終わることなく、教師が児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、児童が学習したことの意義や価値を実感できるようにすることで、自分自身の目標や課題をもって学習を進めていけるように、評価を行うことが大切なのである。

2. 目標と評価規準で単元をデザインする

単元を通した授業デザインでまず行うことは、学習指導要領を基に単元の目標を設定することである。目標の表し方は授業者が決めることですので、絶対にこのように設定しなければならない、というものではないが、目標は総括的に示すことが望ましい。目標を設定するということは、今単元を通して、社会的事象の見方・考え方を働かせ、問題解決的な学習を通して、目標の実現に向かうことになる。次に行うことは、目標の実現に向けて単元を通して見取る子供たちの姿を分析的に設定することである。つまり、これが単元の評価規準ということになる。学びの入り口である単元の目標と学びを見取る出口である単元の評価規準を設定することで、単元を通した大まかな授業デザインをしたことになる。

この単元の目標と評価規準はセットで考えることが大切である。単元の目標に描かれていないことは、単元の評価規準に設定しない。逆に、単元の目標に描かれているものは、単元の評価規準にも描く必要がある。具体的には、以下の手順が考えられる。

○小学校学習指導要領第2章社会科の内容をチェックする

○単元の目標を設定する

○3つの評価の観点ごとに評価規準を設定する

↓

○3つの評価の観点を盛り込んだ指導と評価の計画を作成する

単元目標と単元の評価規準から単元をデザインすることについては、図1、図2を参照いただきたい。

3. 「評価したことを指導に生かす」ことが基本

学習評価の基本は、子供の学習状況を捉えることとともに、その結果を指導に生かすことである。一方で、法定の表簿である児童指導要録における「評定(3, 2, 1)」を定めるための評価資料を集める趣旨から、ABCの評価を定めて記録する必要もある。すなわち、学習評価には「指導に生かす」と「記録に残す」という二つの側面がある。

「評価したことを指導に生かす」ことは、基本的に毎時間行う。子供の学習状況を評価規準に照らして丁寧に見取り、指導に生かすことで、子供一人一人の学習改善につないでいく。そのためには、子供一人一人の学習状況を把握して、指導に生かすためには、評価規準に照らして、「どのような評価資料から、どのような具体的な姿を捉えるのか」という評価方法を明確にしておく必要がある。

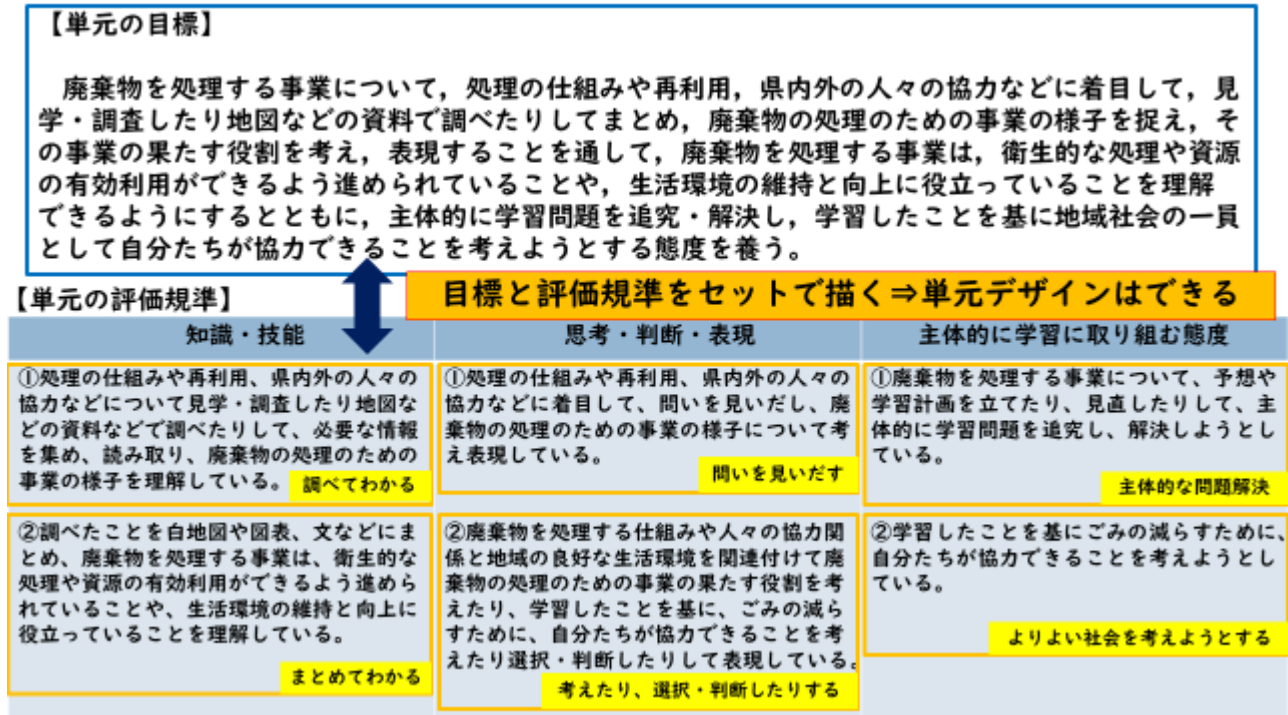
そこで、学習状況を具体的に捉えるために評価規準を設定する時には、例えば、ノートの記述内容から「廃棄物を処理する事業は、衛生的な処理や資源の有効利用ができるよう進められていることや、それらは生活環境の維持と向上に役立っていることを理解しているか」を評価する。というように、「～(評価資料)から、『～しているか』を評価する」という記述でまとめることが考えられる。『～しているか』という姿をあらかじめ具体的に想定しておくことで、「努力を要する」すなわち「～していない」と評価せざるを得ない子供への指導の手立てが明確になるからである。

「評価したことを指導に生かす」ことは毎時間行うが、単元を通してそれぞれの観点の実現状況が把握できる段階で、さらに、継続的に指導を積み重ねた結果の学習状況を捉えられる段階で評価したことを記録に残す必要もある。つまり、特に指導した結果としての評価資料を全ての児童から収集する場面を指導と評価の計画に重点的に設定することが大切である。その場面がつまり「評価したことを記録に

残す」場面である。

小学校社会科の評価規準は、単元における観点ごとの評価規準を①と②に分けて二つずつ設ける形を基本としているため、自ずと評価規準②で評価資料を集めることが多くなる。それは、「指導と評価の一体化」の観点から、単元の目標に沿って指導した結果が表れる場面と考えられるからである。そのため、評価資料を集めてABCを定める場面は、単元の後半に多くなると考えることができる。ただし、例えば単元によっては「主体的に学習に取り組む態度」の観点の評価規準②が設定されない場合もあり、その場合は評価規準①で評価資料を集めることも考えられる。他の観点においても、「評価資料は必ず評価規準②で集め、評価規準①では集めない」などと固定的には考えず、柔軟に計画することが大切である。単元の学習全体を見据えて、三つの資質・能力を意図的・計画的に養うよう指導し、指導した結果を評価資料とすることを基本とし、単元の前半において評価資料を集める場合には、目標に沿って丁寧に指導した上で、その結果を評価資料とする必要がある。

【図1：単元目標と評価規準をセットで描く】



【図2：単元の評価規準を基に単元をデザインする】

